

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 21 日現在

機関番号：32688

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010 年度～2011 年度

課題番号：22830096

研究課題名（和文）トランスナショナルな教育戦略と＜コスモポリタンな日本人性＞の形成過程に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Transnational Education Strategies and Construction of “Cosmopolitan Japaneseess”

研究代表者

額賀美紗子（NUKAGA MISAKO）

研究者番号：60586361

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、国際移動の増大やトランスナショナリズムを特徴とするグローバリゼーションが、家族の教育戦略やアイデンティティ、能力に与える影響を日常生活レベルで考察することである。ロサンゼルスに住む日本人家族を対象としたフィールドワークの結果、母親たちの育児目標は子どもを「コスモポリタンな日本人」に育てることにあり、そうした育児を支えるトランスナショナルな社会空間を構築するため、「徹底した母親業」が行われていることが分かった。これを受けて子どもたちは、日本人という枠組みにとらわれない重層的なアイデンティティを構築し、その過程で「柔軟性」「社交性」といった「グローバル型能力」を獲得していることも明らかになった。こうした知見から、「コスモポリタンな日本人」を育てる可能性や問題点について検討した。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this study is to explore how globalization, which is characterized by increasing international movement and transnationalism, influence families' education strategies, identifications, competencies in their everyday lives. Based on a fieldwork of Japanese families in Los Angeles, the study finds that the mothers strive to raise a 'cosmopolitan Japanese' child through engaging in intensive mothering, which involves concerted efforts to create transnational social fields. Under such child-rearing strategies, these children construct multi-layered identities which go beyond a Japanese boundary, and in that process acquire global competences such as 'flexibility' and 'sociability'. From these findings, the study highlights both the possibilities and problems regarding 'global competencies' and 'cosmopolitan Japanese' children.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 22 年度	1,240,000	372,000	1,612,000
平成 23 年度	1,140,000	342,000	1,482,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,380,000	714,000	3,094,000

研究分野：国際社会学、異文化間教育

科研費の分科・細目：教育社会学

キーワード：トランスナショナリズム、日本人アイデンティティ、教育戦略、家族、ロサンゼルス、アメリカ

1. 研究開始当初の背景

国際移動が地球規模で拡大する中で、海外に在留する日本人の数は増加の一途をたどっている。海外在住日本人の子どものホスト社会適応に関する先行研究は、駐在家族に焦点をあてたものが多い。1990年代初頭までに興隆したこれらの研究は、移住者に対するホスト社会からの同化圧力に注目したものであり、現地社会に「同化」するか、そこから「分離」するか、二者択一的なライフスタイルを提示するものであった。

しかし、近年の研究では日本との関係を維持しながら現地社会とも関わり、ハイブリッドな文化を獲得するトランスナショナルな日本人家族の増加が指摘され始めている。グローバリゼーションの圧力の中で、現地社会に対して「同化」「分離」以外の適応が模索されているのである。こうした研究は、母国日本とホスト社会の両方を視野に入れたトランスナショナルリズムという枠組みから、子どもたちが新しいアイデンティティや能力を模索していく過程を検討する必要があることを示唆している。

海外在住日本人家族のトランスナショナルな教育戦略や、それに伴うアイデンティティや能力に関する実証研究の蓄積は、管見の限りまだほとんど見出すことができない。英語圏ではトランスナショナル家族の研究蓄積が見られつつあるが、こうした研究と比較しながら日本人家族のトランスナショナルな教育戦略や子どもの社会化過程の特徴について考察する必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、国際移動の増大やトランスナショナルリズムを特徴とするグローバリゼーションが、家族の教育戦略やアイデンティティ、能力に与える影響を日常生活レベルで考察することである。研究事例とするのは、トランスナショナルな実践を顕著に見出すことのできるロサンゼルスのある地域に居住する日本人家族である。具体的なりサーチクエスションは以下の3つである。

(1) 母親と子どもたちが生活するトランスナショナルな社会空間を検討する。その空間の構造と文化はどのようになっているのだろうか。日本人家族はどのような資源をこの空間から受け取ることができているのだろうか。

(2) 母親たちの認識や行動、心理的葛藤に注目する。母親たちはトランスナショナルな社会空間の中で、どのような教育戦略を生み出し、実際にどのような育児をしているのだろうか。そのことは、彼女たちの葛藤やジェンダー役割、日本人アイデンティティにどのような影響を与えているのだろうか。

(3) 親の教育戦略の影響下にある子どもたちの「声」や、日常の相互作用に注目する。子どもたちは日常生活の中でどのように日本人アイデンティティを育み、どのような能力を育てていっているのだろうか。

以上の問題を通して、本研究はトランスナショナルリズムという視角に依拠しながら、国際移動した日本人の母親と子どもたちが、ロサンゼルスという地で教育戦略を実践し、新しいアイデンティティや能力の在り方を模索し、葛藤する過程を解明する。

3. 研究の方法

(1) 日本人家族が集住するロサンゼルスのX地区においてフィールドワークを行った。X地区は高学歴、高収入の住民が多く、そこに住む日本人家族も高階層に位置付けられる。こうした家庭の経済資本・文化資本の高さを背景に、同区の教育程度は全米レベルでも非常に高い。日本人が多く通う小学校の人種構成はアジア系と白人が半数ずつで、黒人・ヒスパニックは非常に少数である。

筆者はこの地域で2006年から継続的にフィールドワークを行っており、2010年度～11年度にかけては以下の調査を実施した。

- ① 2007年にインタビューを行った9人の母親と7人の子どもの追跡インタビューを実施した。また異なる地域に住む母親1名にインタビューをした。
- ② 公立小学校2校と日系の塾を訪問し、授業観察と教員インタビューを行った。
- ③ 政策文書や日本人コミュニティで発行されている各種メディアを収集、分析した。

(2) ロサンゼルスから帰国した家族10件の追跡調査（インタビューまたはアンケート）を実施した。

(3) 国内の「グローバル人材」に関する政策文書を収集し、その理念的定義づけや、そうした理念が出てきた歴史的背景および変遷について分析した。

(4) コスモポリタニズムに関する先行研究を収集し、トランスナショナルリズムやマルチカルチュラルリズム、グローバリゼーションといった併存する概念との関係を分析した。

(5) ロサンゼルスに住む家族を対象として、2006年から継続的に収集してきたデータを整理し、「グローバルな能力」育成を強調する近年の政策的動向との関連性の中で、移動する日本人家族の教育戦略や子どものアイデンティティ・能力形成の再分析を試みた。

(6) 帰国子女受け入れ校を訪問して教員インタビューを行った。そのデータと、過去に収集した帰国子女受け入れ校の参与観察・インタビューデータの再分析も合わせて行った。

4. 研究成果

(1) 「コスモポリタンな日本人」概念の検討

教育政策の分析からは、グローバリゼーションの圧力が高まる中で、目まぐるしい変化や文化的多様性に柔軟に対応できる「グローバル型能力」を持った子どもの育成をめざす機運が急速に高まっていることが指摘できる。またその一方で、「日本人としてのアイデンティティ」の重要性は依然として支持されている。従来の海外子女教育の中で期待されてきた「国際的な日本人」の考え方を継承しつつ、よりグローバルな競争という文脈を視野にいれた人間像が「グローバル人材」政策の中で目指されてきているといえる。この背景には競争原理と強い個人を前提とする新自由主義的思想が見いだすことができる。

そうした政策レベルの影響は、国際移動する家族の教育戦略に及んでいることが示唆される。筆者がロサンゼルスフィールドワークを通じて見出したのは、日本とアメリカにつながる越境空間の中で、日本人という意識を持ちつつ、文化や国の境界を越えて活動する柔軟性や社交性を持った子どもたちの成長である。筆者はこうした子どもたちを「コスモポリタンな日本人」と名付け、その成長過程に母親の教育戦略、学校やコミュニティ、友達集団といった文脈が大きな影響を与えることを明らかにした。以下にその内容を具体的に示す。

(2) 母親たちの教育戦略とそれを支える社会的構造

インタビューの分析から、母親たちは子どもが「日本人」としてのナショナルな能力と、英語力、幅広い視野や柔軟性、社会性といった「グローバル型能力」の両方を兼ね備えた「コスモポリタンな日本人」に育つことを目指していることが明らかになった。その背景には、母親たちが①国境を超える想像力と計画力、②国際比較する認識枠組み、③日本とアメリカとの関係を同時に保とうとする志向性を身につけていることがある。筆者はこうした二元的な心性を、「越境ハビトゥス」の概念のもとに明らかにし、こうした心の在り様が教育戦略を生み出す原動力となっていることを指摘した。

こうした国境を越える心性がなぜ、どのようにして獲得可能になるのだろうか。それは彼女たちが身を置くトランスナショナルな社会空間に求められる。具体的には、母親たちを日本から送り出す移住システムの確立と、彼女たちをアメリカで受け入れるロサンゼルス日本人コミュニティにおける資源の豊かさによって、越境ハビトゥスは作られ、教育戦略へと転換される。「制度的完備」がみられるロサンゼルス日本人コミュニテ

ィではあるが、現地社会との関係を構築し、ローカルな情報を入手する経路が確保されつつあり、そのことが越境ハビトゥスの獲得を可能にしている。これは従来「閉鎖的」と捉えられてきた日本人コミュニティに新たな変化が生まれていることを示す。

(3) 母親たちのアイデンティティの葛藤

上記のようなトランスナショナルな教育戦略は、女性たちに徹底した母親業を要請する。具体的には、多様な活動を組織し、子どもの態度、行動を身近で監督し、宿題を手伝い、現地の教師・親と関わり、子どもの気持ちに寄り添うなど、子どもの生活の細部にまで配慮したケアを母親たちは行っていた。この過程で母子の関係は非常に密接になり、日本人の母親や教師の間では「素直な子どもたち」の言説が生まれていた。その一方で、育児に付随する母親たちの心理的葛藤は注目すべきものがある。

母親たちは「良い日本人ママ」になることのプレッシャーを強く感じて深い葛藤を抱えていた。そうした価値観は、①日本人コミュニティ内部の規範であると同時に、②アメリカ社会の差別や偏見への抵抗として生み出されるものである。「良い日本人ママ」を実践し続けることの困難はいくつか見出すことができる。第一に自身のコスモポリタン欲求との衝突、第二に日米どちらの母親理想像にも当てはまらない中途半端さ。母親たちは日本社会、アメリカ社会、そして現地の日本人コミュニティといった重層的な社会的文脈に埋め込まれており、それぞれの「場」は、時には矛盾したやり方で「良い日本人ママ」というアイデンティティを女性たちが実践することを求めている。母親たちはそのことに葛藤を抱きつつも、アイデンティティを管理調整して日本人集団と「つかず離れず」の距離を保ちながら「良い日本人ママ」を実践する術を獲得することで葛藤を解消しようとしていた。

(4) トランスナショナルな子どもたちに対する「公正」な教育機会

「コスモポリタンな日本人」を育てるための教育機会が、現地校・日本人補習校、塾といった場でどのように提供されているかという点を考察した。まず子どもたちが通うアメリカの現地校に関しては、新自由主義的教育政策のもと、個々の子どもや集団のニーズに配慮することができない「容赦なき形式的平等」が、支配的な学校文化になっていることを指摘した。具体的には、州の統一テストによる競争文化の浸透や、異文化理解授業をする授業時間の削減、英語を母語としない子どもに対する予算の圧縮などが挙げられる。しかし、そうした制度や文化に対抗する教師

の個人的な取り組みや、日本人会における母親と教員の対話を通じて、資源配分の「公正さ」に関する合意形成のプロセスが始動する場合も見出すことができた。多文化共生を求める個人と、それに対抗する競争主義的・個人主義的な制度のせめぎ合いが現在のアメリカの学校では非常に顕著になっている中で、マイノリティのニーズをくみ取る仕組みの構築が一層重要になってきている点を示唆した。

現地校では単一的な「国」「文化」を境界とするまなざしや制度が強化されているが、子どもたちが通う補習校ではそうした境界の揺らぎが見いだせる。その背景には従来とは異なり、国や文化を越境する視点や能力を持った子どもたち、そしてそれを望む日本人の親が増えていることがあるだろう。「日本人」の境界を厳格に管理することができなくなっているのが現在の補習校の状況である。

「コスモポリタンな日本人」のニーズに最もよく応えているのが、現地の日系補習塾である。バイリンガルの教師は「無節操」に日米の文化を繋ぎ合わせることによって、国や文化を横断する教育を行おうとしていた。母親たちは、補習校では満たされないニーズの充足を塾に求めるようになってきている。しかし塾を選択する際の精神的負担や金銭的負担は決して軽いものではない。その負担を担うのはたいてい母親である。教育の私事化が進行する中で、現地校や補習校といった「公」的な教育機関が、国境や文化の管理をより柔軟にしていくことが求められる。

(5) 子どもたちに見られる重層的アイデンティティの形成

子どもたちのインタビューからは、彼女たちが「日本人」「アメリカ人」「アジア系」という複数のラベルを同時に身につけることを肯定的に捉え、そうした重層的なアイデンティティを主体的に獲得しつつあることが明らかになった。その背景には、日本社会、アメリカ社会、そしてロサンゼルス日本人社会のそれぞれと彼女たちが関わり、その「場」における規範の影響を受けていることが指摘できる。その重層的な文脈の中で、子どもたちが「日本人であること」に対して様々な意味づけをしていた。

第一に、多くの子どもたちは「日本人」であることに強い誇りを抱いていた。これは「日本人であること」がアメリカ社会を生き抜く上での資源になると彼女たちが捉えていたことによる。第二に、その一方で子どもたちは自分の「日本人らしさ」に違和感も抱いていた。こうした感情は大体滞米1年以上の子どもたちにみられた。かれらは自分が「日本人」という集団に足場を置きつつもそこからみだし、「アメリカ人」や「アジア

系」といった集団にも参入する者として自分を認識するようになっていた。第三に、子どもたちの帰属感は日米どちらか一方ではなく、どちらにも置かれていた。

日本や日本語に関する知識の欠落や、アメリカと日本のふたつの国にまたがって「家」があるという感覚は、子どもたちに自分が「正統な日本人」ではないという不安感や苛立ちを抱かせていた。重層的アイデンティティを形成する過程には、国を単位とした既存のカテゴリーに引き裂かれる心理的な葛藤が伴うことに注目しなくてはならない。子どもたちは既存の「日本人らしさ」や「アメリカ人らしさ」の言説に取り囲まれ、そのどちらにもぴったりと当てはまらない自分に時として焦燥感を抱きつつも、その両者が「入り混じった状態」を理想の自己像として希求していると分析する。さらに、その重層性のどのアイデンティティに比重を置くかは個人によって差があり、「日本人」というカテゴリーの内部は非常に多様化していることが指摘できる。

小学校から中学校にかけてのアイデンティティの変化を追うと、日本に一層強い憧れを抱くようになる子どもがいる一方で、日本人同輩集団との距離をとって「アメリカ人らしさ」を強調する子どもが出てくる。この違いの形成要因については今後検討を重ねる必要があるが、日常的に親しくしている友人関係や、家族と日本との関係性（兄弟が日本に滞在しているなど）によって影響されると考えられる。

(6) 子どもたちの能力形成－「柔軟性」「社交性」

重層的なアイデンティティを形成するということは、場に適応する「柔軟性」「社交性」という能力を獲得する過程と重なっていることを分析した。「柔軟性」は、状況に応じて言語や態度、行動を切り替えたり、二つの文化を混ぜ合わせたりする能力として定義する。「社交性」は、「他者を包摂し、世界に向けて開かれた社会的関係をつくる能力やコミュニケーションスキル」と定義する。

まず、柔軟性に関して述べると、子どもたちはロサンゼルス生活の中で場や相手に応じて柔軟に「日本人であること」を調整していかななくてはならないことを意識していた。その態度や言語の切り替えの方法について、3つのタイプ「教室の内外での切り替え」「家の内外での切り替え」「相手に応じた切り替え」－をデータから抽出し、分析した。

一方、柔軟性を円滑に獲得できない子どもの事例を取り上げて、柔軟性の獲得にはマイノリティの文化を受け入れる現地校の文化や日本人の子どもの数が影響を与えていることを分析した。さらに、柔軟性という能力

は他者の文化的越境や資源獲得のために利用できる社会的資源であることも重要なポイントとして示唆した。

「社交性」については、現地校の休み時間やランチタイムの参与観察をもとに、子どもたちが「日本人」の境界を強化させて他者を排除したり、逆にその境界を緩和して日本人以外の子どものとも親密な関係性を築く過程を明らかにした。注目したのは、子どもたちが日本の子ども文化を巧みに利用して友人関係を形成していることである。日本のモノや食べ物や遊びを通して、子どもたちは時に排他的な日本人集団を形成するが、また別の時には他者に対して包摂的な「日本人」のあり方を実践していることを考察した。

(7) 帰国した子どもたちのアイデンティティと能力形成

追跡インタビューをした子どもたちの大半は、特別枠を利用して帰国子女受け入れ校に進学していた。ロサンゼルスで培われた重層的アイデンティティやコスモポリタンな能力は維持される傾向にあった。とりわけ、越境ハビトゥスのような能力は強く維持され、アメリカの学校との比較視点から日本の学校を批判的に見て、自らを既存の「日本人」という枠組みからはみ出た人間として認識していた。想像の中でロサンゼルスを回顧したり、将来はどこかの時点で海外に行きたいという志向も強い。また、一つの友達グループにはまらず、幅広い友人関係を築こうとする社交性の発揮が多くの子どもの間にみられた。しかし、子どもたちが「帰国生」というカテゴリーをどのように操作してアイデンティティを再構築していくかは、帰国生を受け入れる学校環境によって大きく影響されることが指摘できる。

以上の考察から、筆者は日本人の母親と子どもは、かつて考えられていたように受け入れ国に完全に「同化」して日本文化を消失してしまうわけではなく、また受け入れ国から完全に「分離」して日本にばかり目を向けるのでもないことを明らかにした。かれらは、受け入れ国と母国の両方と繋がり、両方を織り交ぜた文化やアイデンティティを創造しながら、グローバリゼーション下で「国」や「文化」が揺らぐ日常生活に適応しようとしている。その様々な葛藤を伴う過程に「コスモポリタンな日本人」の成長を見出すことができる。

この「コスモポリタンな日本人」の特徴は、多文化主義的、利他的なアイデンティティと能力を持つということである。母親たちは、自分の子どもたちに受験競争だけにとらわれない「広い視野」を持ち、色々な子どもと親しくして助け合うことを求めている。こう

した「コスモポリタンな日本人」像を近年の「グローバル人材」政策においても強調すべきではないかと筆者は考える。異質性を包摂するアイデンティティや、他者と共生する能力を積極的に評価するような文化と制度を設計していくことが必要である。と同時に、人々による国や文化の横断を可能にするような学校や社会の仕組みを考えていくことが肝要であろう。

今後は、「グローバル人材」をめぐる一連の教育政策の行方を追ひ、その理念をマルチカルチュラルイズムやコスモポリタニズムの視点から批判的に検討していくことが第一の課題である。日本よりも先んじて教育政策にグローバル人材の視点を入れている欧米との比較の中で、日本の特殊性や共通点を明らかにしていきたい。

また、日本とアメリカを結ぶトランスナショナルな社会空間に注目し、そこに居住する日本人の親の教育戦略の多様性について、階層や地域の差異を考慮しながら、今後一層の検討を加えていきたい。新自由主義的な「グローバル人材」政策が進行する中で、アメリカに移動した子どもたちや、アメリカから帰ってきた子どもたちがどのような文化資本を獲得し、どのような進路や職業を選択するのかという点を明らかにすることも課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① Nukaga, Misako. (forthcoming)
“Planning for a Successful Return Home: Transnational Habitus and Education Strategies among Japanese Expatriate Mothers in Los Angeles”
International Sociology.
- ② 額賀美紗子 (2011) 「『公正さ』をめぐる教育現場の混迷—NCLB法下で『容赦なき形式的平等』が進むアメリカの学校—」、『異文化間教育』、(査読有)34巻、pp. 22-36.
- ③ Nukaga, Misako. “Transnational Educational Strategies among Japanese Families in Los Angeles”
London Digest 6: 28-9.

[学会発表] (計4件)

- ① 額賀美紗子 「子ども文化におけるエスニック境界の交渉—『開かれた関係性』構築の可能性」日本教育社会学会大会、2011年10月24日、お茶の水女子大学.

- ② 額賀美紗子「トランスナショナル空間における<コスモポリタンな日本人性>の構築—ロサンゼルス日本人家族を事例に」異文化間教育学会大会、2011年6月11日、お茶の水女子大学.
- ③ Nukaga, Misako “Planning for a Successful Return Home: A Case Study of Japanese Expatriate Families in Los Angeles” XVII International Sociological Association Meeting, July 15, 2010, Gothenberg, Sweden.
- ④ 額賀美紗子「公正さをめぐる教育現場の混迷—『容赦なき形式的平等』が進むアメリカの学校の事例から」異文化間教育学会大会、2010年6月12日、奈良女子大学.

[図書] (計1件)

- ① Nukaga, Misako and Ryoko Tsuneyoshi. (2011) “The Kikokushijo: Negotiating Boundaries Within and Without.” Pp.213-241 in *Minorities and Education in Multicultural Japan*. New York: Routledge.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

額賀美紗子 (NUKAGA MISAKO)

和光大学・現代人間学部・専任講師

研究者番号：60586361